

平成 27 年度 第 2 回北九州市子ども読書活動推進会議 会議録（要旨）

- 1 日 時 平成 27 年 10 月 6 日（火） 15:00～17:00
- 2 場 所 北九州市立松本清張記念館 地下 1 階 企画展示室
- 3 出席者 〔委員〕 山元悦子委員（会長）他 1 2 名
〔事務局〕 垣迫裕俊教育長 他 2 1 名
- 4 議題
 - (1) 今度の子どもの読書活動の推進について
 - (2) 子ども図書館について
 - (3) 次期「北九州市子ども読書プラン」の方向性について

5 主な質議応答、意見

議題：子ども図書館について

委員／ 子ども図書館の対象から高校生がはずれているようだが、ヤングアダルトサービスというのは、中・高校生を対象として展開していくものであるため、対象に高校生も入れていただきたい。また、子ども図書館が収集して提供する良質な資料の中に、知識の本、科学読み物といった区分のものも入れて、調べ学習にも対応できるようにするべきである。

子ども図書館の機能として「地区館、分館における児童サービスの統括」とあるが、地区館、分館での資料の選書などすべて子ども図書館で行うのか。

事務局／ 現段階のたたき台としては、中学生までを対象としているが、高校生を対象としたものを子ども図書館に置くのか、中央図書館に置くのかなど今後も検討していく。調べ学習への対応については、現在、地区館において資料やレファレンス機能が充実してきているので、子ども図書館との分担など全体のなかで考えていきたい。選書については子ども図書館がリードをとり全体の統一を図りながら地区館との話合いで決めることを考えている。

委員／ 育成された子ども司書に、どれほど活躍の場があるのかと疑問に思っている。いっそ、中学生・高校生は、子ども図書館を活動の拠点にして、主体的な読書活動を推進する側で力を発揮してもらったらどうか。

実際に、保護者によるブックヘルパーという活動が続かない場合、中学生の図書委員が放課後、図書室を開けているということを耳にする。お薦めの本などのイラストや文章を書かせても、中学生には素晴らしい能力がある。

委員／ ブックヘルパーなどのボランティアの方たちがどうなっていくのか、働く女性が増えているので、今後は難しいのではないかと。少子化になっていくので、どんどん現場に携わる大人が減っていくのではないかとということも考え、子どもを主役にして、子どもを主体に活用していく方法を探っていくのも大事かと思う。

事務局／ プランの中では、柱のひとつに「主体的な読書に関わる子どもの育成支援」という項目を加え、新しく「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」の啓発や「子ども読書会議」をやりたいと考えていたが、子ども図書館の機能としては想定して

おらず、別の会場だと考えていた。しかし、今のご意見を伺えば、子ども図書館そのもので、子どもたちが主体となった話し合いの場を持ち、いろいろな事業を企画し、子ども図書館で行うことも考えられる。そこには気が付いていなかった。非常にありがたいご意見である。

委員／ 子どもを主体にする前に、大人がしっかりしなくてはいけない。ノーテレビ・ノーゲームなどの啓発だけではなくて、その日ゲームをしなかったらどういうことをしたらいいのか等専門的な知識を持つ方の助言も啓発チラシの中に入れてはどうか。

委員／ 人材育成について、人材育成でスキルアップを目指すということだが、現在、司書、ブックヘルパー、ボランティアの方がどれくらいいるのか、それぞれの業務の範囲はどういうものがあるのか。スキルアップするというのは、一定基準を持って、それから上に積み上げていくという形を取るかと思うので、この人材育成というところで数字的なものや、ある程度の基準を示しておいたほうがいいかと思う。

それともう1つ、子ども司書養成講座を受けた子どもは、将来司書になりたいという夢を持ち、周りの友達に本を薦めたりするが、実際に、司書の仕事をしたいと思っても、現在のところ、司書の仕事というのが減ってきているために、子どもたちの夢を打ち砕くところがある。少しでも「読書をみんなに勧めるということがあるよ」という希望を持たせるようなことができればいいかと思う。

事務局／ 図書館における研修機能としては、主に中央図書館が担っており、現在は、主に地域人材の、読み聞かせボランティア、図書館ボランティアの養成を中央図書館で行い、各館で活動をしていただく形をとっている。まだイメージの段階だが、中央図書館が地区図書館の職員を養成し、地区図書館がさらに地域の人材を育成していく、また、中央図書館では、長く活動している習熟したボランティアの、さらなるスキルアップを図るというふうな構造化していきたいと考えている。

事務局／ 学校図書館の状況について、現在、北九州市には小学校 130 校、中学校 62 校あり、31 中学校区に 31 名の学校司書を配置している。残りの 31 中学校区には、近隣の学校司書が巡回する体制で全体をカバーしている。

ブックヘルパーについては、本年度 1 月の段階で約 4,700 名の登録をいただいている。養成のための研修については、学校司書の養成研修として年 6 回行っており、その内の 3 回は学校司書のみ、うち 1 回は学校の図書館教育主任との合同の講習会、それから、残り 2 回については、ブックヘルパーとの合同研修という内容である。

併せて、子ども司書養成講座を受けた児童生徒の活用については、子どもたちが、児童会生徒会活動という、自治的な活動の中で、図書委員会として、主体となって読書活動や学校図書館を活用する取組みなどを、多くの学校で行っているところである。その中で、例えば、昨年度、文部科学省読書活動優良実践校の表彰を受けた南小倉小学校などは、まさにこの子ども司書養成講座を受講した子どもが学校の児童会の中で主体的に活躍していると聞いている。そのような形で、子ども司書養成講座を受けた子どもが徐々に学校でも活躍しているという状況が出てきている。

委員／ 中・高校生の読書離れという状況がある。中・高校生に読書をする場を提供するというのと、中・高校生が活動する場を提供するということは少し違うと思う。中・高校生の活動の場は、大変賛成であるが、それとは別に、やはり中・高

校生の読書の場というのを確保していただきたいという意味で、子ども図書館の対象に高校生も入れていただきたい。

議題：今後の子ども読書活動の推進について

委員／ 23日の「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」について、年にわずか数回の学校が開いている23日に、例えば、各先生が学年に応じた短い本とか、短編を子どもに薦めて、それについての感想を宿題にするとか、具体的なアプローチをして、学校として取り組んでもいいのではないか。

ブックヘルパーとして、図書室の中でできることは、やっているが、具体的にその時間を確実に読書に充ててもらおうということであれば、学校をあげてそういう取り組みをするということも考えたらどうか。

委員／ 学校によって、それぞれ取り組みが違うと思うが、例えば、本校では23日のある週の1週間を「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」として、子どもたちに紙を配り、テレビを何時間見たか、本を何時間読んだか、ゲームをどれくらいしたかというのを全部書かせている。1学期分を集約してみたら、やはりテレビの時間がとても多かったのだが、面白いことに、少しずつ読書の時間が伸びているのが見えた。だから、やはり、やるということには意義があると思っている。

それから、23日にこだわらないでいいのではという意見もあるが、1つの目安として、「23日が読書の日」と啓発のために設定としてすることは、いいのではないかと思う。

委員／ 「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」について、これは子どもだけの問題ではなく、社会全体の問題になっていると思う。子どもを受け身にしないというのは、すごく重要な解決方法になるのではないかと考えている。

例えば23日に、学校の中でノーテレビ・ノーゲームに対する会議をし、どうしてゲームがいけないのか、どうしてテレビがいけないのか、どうして読書はいいのか、そういう自由な討論会などをすることによって、必ず子どもたちの中から、自分たちで答えが導き出されるのではないかと考えている。大人からの啓発だけでは、やらされ感があり発展していかないのではないか。子どもに具体的な意見をたくさん出させて、そこで解決を引き出すというのはどうかと考えている。

委員／ 学校から、例えば、家庭の中に図書コーナーを作るという宿題を出し、子どもに一から考えさせ、家の人と相談や協力をしないとできないようなことをさせてみてはどうか。保護者を動かそうと思ったら、先生方をお願いすることになるのかと思う。

委員／ 学校でも、読書コーナーなどを、教師と親が作ろうというのではなくて、こういうものを作ったらいいよと、図書委員の子ども自身が言えるようになったら素晴らしいと思っている。

その意味で、先ほど話にあった中央図書館の研修計画というのは、ぜひ実行していただきたい。子ども司書養成講座を受けたい子どもは結構多いと思うが、中央図書館まで行くのが大変であるし、選に漏れた子どももいる。行きたいという気持ちを持っている子どもが結構いるので、地区館で子ども司書養成講座をそれぞれ行えば、各学校の図書委員をやって、本が好きになって、中学校でも高校でもやってというふうに、つながっていくと思う。

また、各地区の子ども司書の代表が、子ども図書館に集まって、そこで会議を

して、決まったことを持ち帰ってそれぞれの地区、学校でもやっ払いこうという
そういう組織があつたらいいと思う。

そして、中央図書館は大人のブックヘルパーの人材育成をし、両方で一緒に協
力しながら、子どもの読書環境の仕組みを作つていけたらいいのではないか。

委員／ P T Aの立場から言うと、一般の保護者は「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の
日」すら知らず、「何で読書をしなければならないの」という親のほうが、正直、
大半を占めている。市に条例ができ、子どもの読書活動を推進する動きがある
というこの状況を、一般の保護者は全然分かつていない。読書をすることによつて、
どういふ大人になつていくのか、読書によつて、どんな効果、育つていく部分
があるのかといふことを、保護者に理解してもらわないと、家庭での読書は進ま
ないと思う。

子どもが、「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」のチラシを学校から持つて帰
つて、親に見せるだろうか。見せたら、どうなるか。「今日はノーテレビ・ノー
ゲームデーやけ、ゲームせんでいい、テレビ見らんでいい」と言われる。子どもは、
そんなチラシをわざわざ親に見せない。こういう状況があるといふことも理解し
て欲しい。

今後は、そのチラシを作るだけではなく、それなりに、保護者に対してもアプ
ローチの仕方を考えないと、家庭への普及といふ、家庭の取組みの底上げといふ
のは行われないと感じる。

自分は、読書の楽しさを知つてもらふため「ビブリオバトル」を推進している。
ビブリオバトルは娯楽であり、勉強とは少しかけ離れている。私たちの目指して
いるのは、学校から家に帰つて来て、「今日は何する？ゲームする？外で遊ぶ？ビ
ブリオバトルする？」といふ遊びの中の選択肢の1つになればいいと思つている。

その遊びといふものが楽しくなつたときに、大人でも小学生でも高校生でも、
「次はいつ？次はいい本用意するぞ。」となつてくる。これと教育をどう結び付
けたらいいのかといふことを考へている。

学校で、よくある間違いとして、先生が課題図書を与へ、原稿を書かしてしま
う場合がある。ビブリオバトルといふのは、自分が読んで好きだ、面白いと思つ
た本を持ち寄る自由なものであるはずなのに。そして、高校生大会でよくあるこ
とだが、発表する内容を生徒が書き、先生が添削する。これは、ビブリオバトル
とは言えない。安易に導入すると間違つた形で普及する心配はある。

委員／ ビブリオバトルを大学の授業で取り込んだ際に、一番時間がかかつたのは、選
書であつた。自分で決められない子どもに、どういふふうに、どういふ本を選
ぶようにすればいいか。自分がその本のどこが好きだつたのかといふような、そ
ういふポイントをアドバイスするのに、すごく時間をかけた。本来、読書推進を
するといふのは、そこではないかと思つた。そして、感動したことを自分の声に出
して相手に伝える。本の楽しさを伝えるといふことは、やはり教育的効果は高く、
その後、本を読むといふことに進んでいる。次年度もビブリオバトル大会に出場
したいといふ意欲も出てきている。最初に選書をするところの介添えといふのが、
ものすごく大事なポイントで、それも個性に合わせて、その子どもたちに合わせ
て選んであげるといふのが、このビブリオバトルにおける教育的な効果ではない
かといふふうに、私は思つている。

委員／ 選書がやはり大事と思ふ。その選書を促す手段として、ブックトークがある。
私は、ブックトークをする前に、なぜ読書をするのかといふ話をしてから話す

ようにしている。ブックトークをする方が増えたらいいと願っている。

議題：次期「北九州市子ども読書プラン」の方向性について

委員／ 家庭などでの環境が整っていない場合は、一生懸命にやっても、なかなか推進が厳しい。今、子ども図書館を作り、学校へのアプローチなど、いろいろなことを整えようとしているが、やはり、家庭・地域における子ども読書活動の推進のためには、読書環境を整えるということが必要ではないか。読書が必要だということは保護者のアンケート結果を見ても高い数値で出ており、子どもにも読み聞かせをしたほうがいい、大事なことだと分かっている。しかし、実生活の中で、実行するのは難しい、子どもにテレビを見せないで、どうやって夕飯の仕度をするのですかということ保護者の方から言われた。

大事なことだとは分かっているが、その一歩を踏み出すほどの啓蒙、なぜそうしないといけないのか、これが子どもの成長のこういうことにつながる、ということをもっと伝えていかないといけないと思う。活動の推進だけではなく、読書をしていく環境を整えていくという表現も一言入ったほうがいいと思う。

委員／ 家庭や子育て関係施設における環境の整備について、所管がいろいろな局や課に分かれていて、予算が統一されていないのかという気がする。教育関係、学校であれば、図書にどのくらいお金がかかるとか、この関連施設にどのくらい予算を付けたらいいかという、全体的な予算の見直しというのも少し考えてはどうか。

読書活動をする中の予算の枠組みというのを統一して決めてもらえないか。

事務局／ 予算については、基本的には、例えば、市民センターのひまわり文庫だとかは、図書館で予算をとって対応している。それぞれにたくさん費用のかかることではなく、ソフト的な対応になってくると思うので、一括してこちらのほうで予算をとる形になるのではないかと思います。

会長／ 「主体的に読書に関わる子どもの育成、支援」の新規施策について、これは、具体的な取組みとしては、どのようなイメージのものか。

事務局／ 1つは、来年度から予算を要求して形にしていこうと思っているのが「子ども読書会議」で、子どもたち中心に企画をしていって進めていくということを考えている。

委員／ 本好きな子どもから本好きな子どもへ、そして読まない子に本好きな子どもが、「こんなのがいいよ」と薦めるということは、子どもたちの自主的な活動としてとても大切なことだと考える。全く本を読まない子にとっては、1冊の本を最後まで読むということが難しい場合もあるので、まず1冊の本を完読するためにも、ビブリオバトルはとても興味深いものであって、北九州市でも推進してもらいたい。

「ブックスタート」について、どこかの市で、このブックスタートのラッコのマークのトートバックに入れて本を配っており、そのトートバックを、子どもたちが自分で図書館に行ったときに、借りた本を入れるのに使っている。少し予算がかかることではあるが、導入すれば普及にもつながるのではないかと思います。